薬師寺　東面廻廊発掘調査 現地説明会資料 1989.8.19

薬師寺
奈良国立文化財研究所
平城宮跡発掘調査部

薬師寺では、金堂、西塔、中門、僧坊などの再建にひき続いて、廻廊を復興する計画がある。廻廊については、すでに数次にわたる発掘調査が実施されている。その成果にもとずいて、廻廊全体の規模や構造についての復原がこころみられているが、不明の点も残されている。とくに、東面廻廊の規模に関しては、まだ不確定の部分もあり、再建のための設計に先立ち、７月の初めから発掘調査を開始して、今日にいたっている。調査は、まだ中途段階にあるが、これまでにわかったことがらを報告したい。

薬師寺廻廊については、これまでに1968、1969、1985、1988年に発掘調査が行われている。その結果、多くの事実が明らかにされたが、調査を進めるにつれて、所見の変わった点もある。これまでの成果を要約すると、

①廻廊は、当初、単廊で計画され、礎石を据えつける工程まで工事が進んでいた。
（単廊の規模は、桁行、梁間とも12.5尺・3.7 m）

②しかし、単廊は、基壇の完成に至る前に計画変更され、同じ位置で複廊が造営される。

③複廊の規模は、南面廻廊は桁行13.5尺、梁間10尺である。
東面廻廊については、
1968･69 年調査……桁行14尺・梁間10尺
1980年の調査……桁行13.7尺・梁間10尺で、東面廻廊全体では桁行が25間あるとされ、桁行寸法の所見が変わっている。
いっぽう、1988年の西面廻廊の調査では、桁行14尺、梁間10尺という結果が得られている。

④廻廊は天禄４年（973 ）の大火災で焼失したのち、再建された。史料によると、11世紀のはじめには再建は完了したらしい。

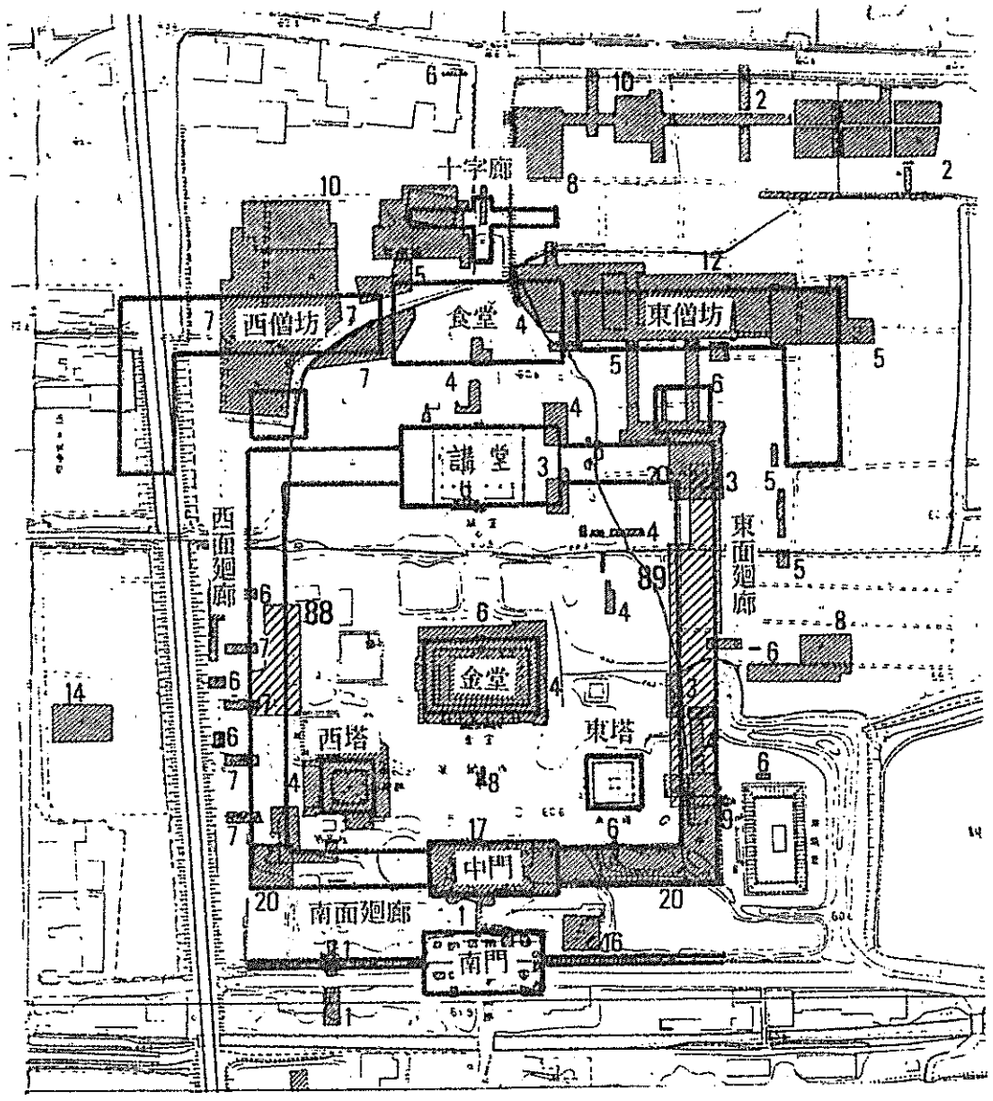
⑤西面廻廊の調査で出土した軒瓦をみると、平安時代までの瓦にくらべると、中世以後の軒瓦が著しく少ない。これは康安元年（1361）の大地震で「中門、廻廊ことごとく転倒する」と史料にあるので、そののち再興されなかったことによるものと考えられる。

今回の調査では、東面廻廊の複廊の礎石抜き取り穴のほとんどを検出した。また、複廊の礎石を据えつけるための穴（掘形）や、単廊の礎石据えつけ掘形も部分的に検出した。基壇の両側には、基壇外装の凝灰岩切り石列が残り、その外側には、遺物をまじえた土砂が堆積している。

東面廻廊についての従来の調査の成果を考え合わせて、今までに推察できた点をあげると、

(1)東面廻廊の柱間寸法は、梁間10尺、桁行14尺である。
(2)東面廻廊全体の桁行の柱間数は、14尺等間で割り付けると、25間には若干足りない。
(3)単廊は、桁行、梁間とも12.5尺で、東面廻廊全体での柱間数は30間になる。
(4)東面廻廊の中ほどでは、基壇の東側に多量の軒瓦が堆積している。それをみると、軒先からずり落ちたままの状態のものが多い。この瓦層には12～13世紀の瓦器の破片が含まれている。

したがって、東面廻廊建物の廃絶は、この年代をさほど下らない時期に求められる。



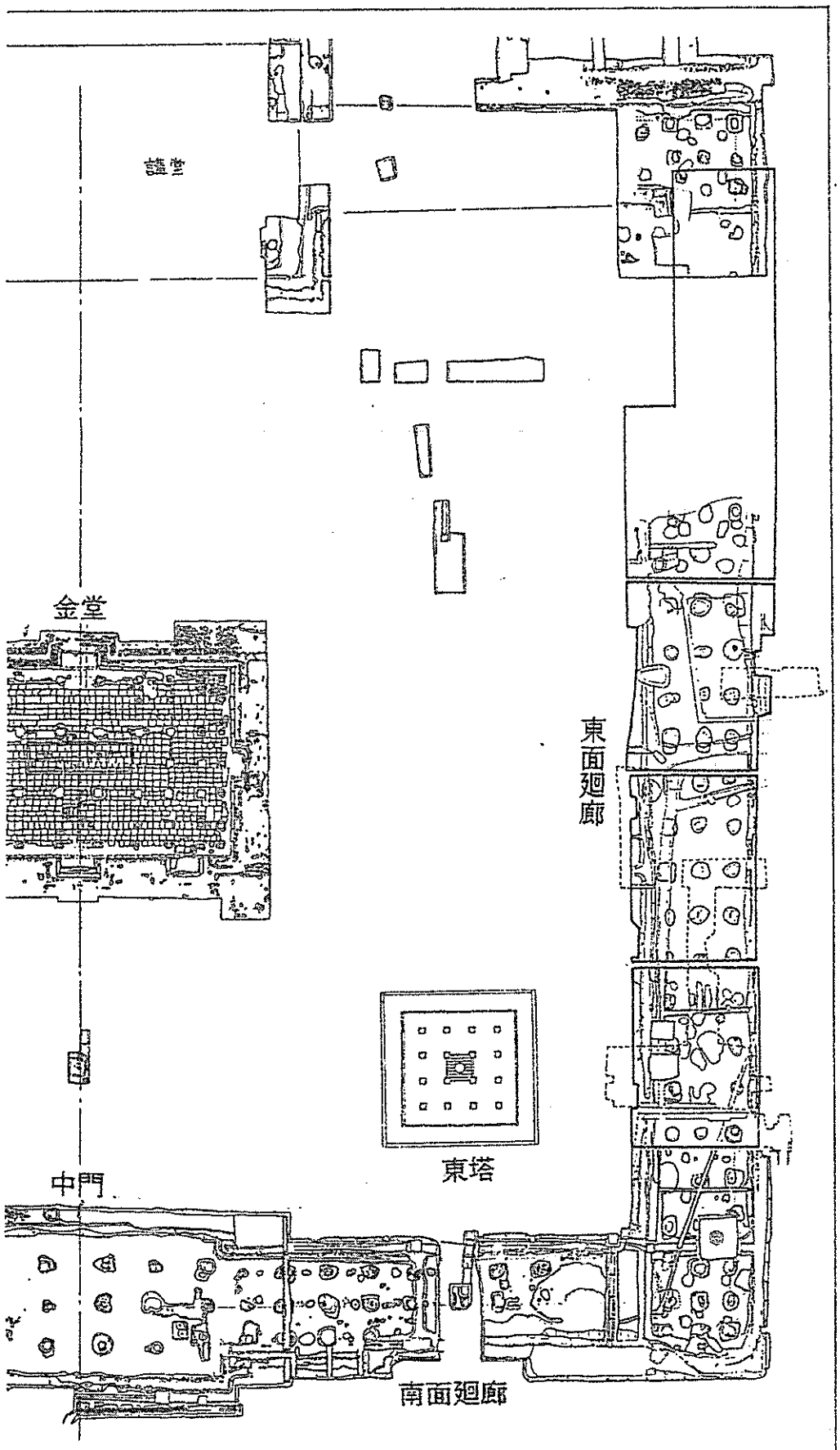
調査位置図

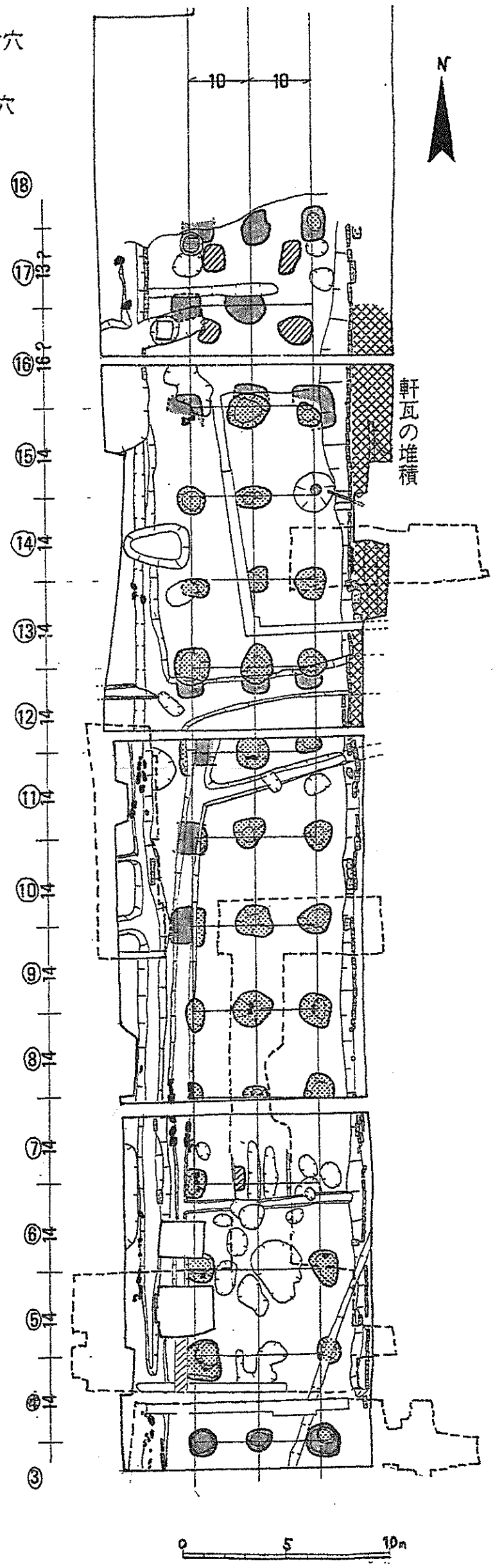
遺構配置図

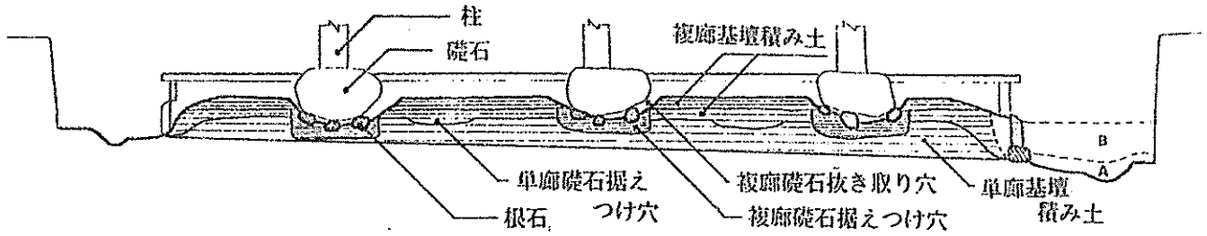
複廊礎石抜き取り穴

複廊礎石据えつけ穴

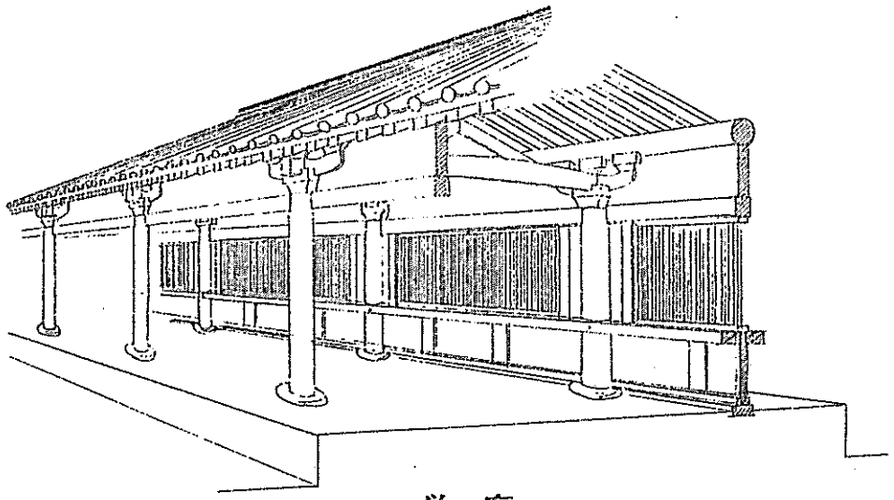
単廊礎石据えつけ穴



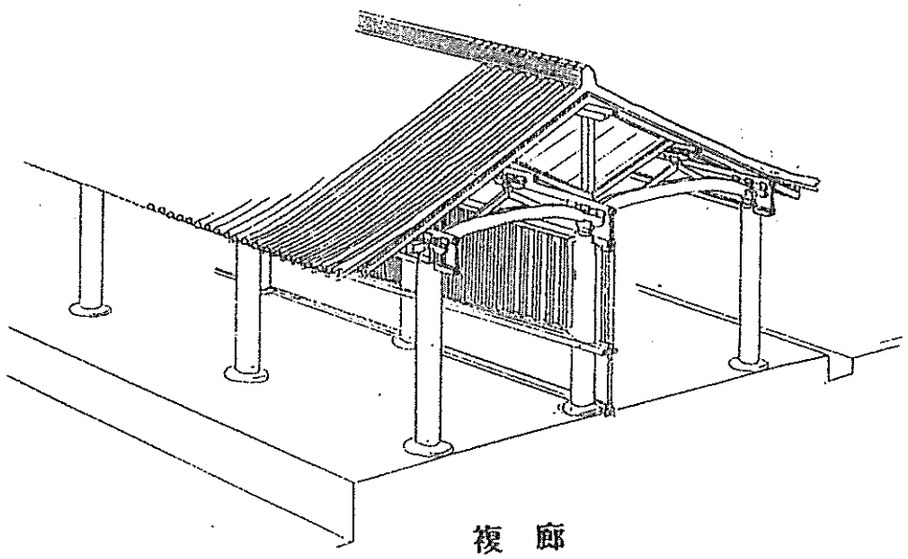




廻廊基壇断面模式図



単　廊



複　廊

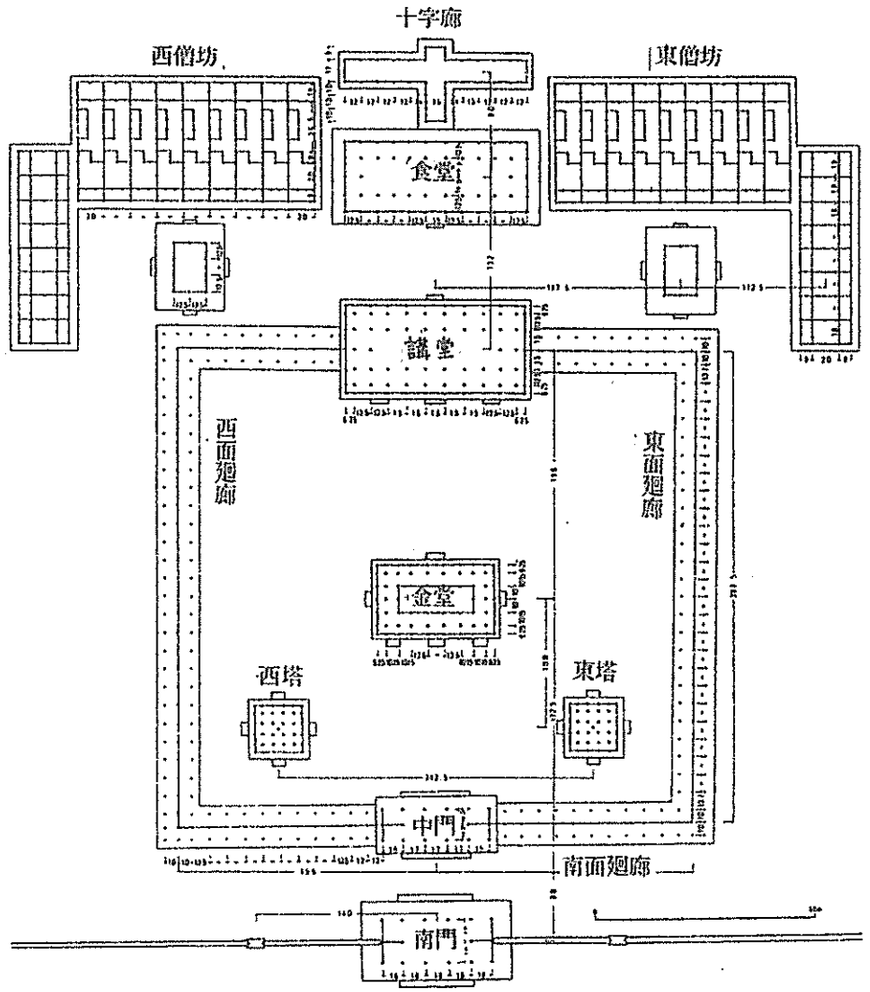
薬師寺回廊関係史料抄

1　薬師寺縁起

一、四面廊一匝　　南面廿間、北面十六間、東面廿四間、西面廿五間、天禄四年二月廿七日夜焼亡了、其後依　宣旨周防国造立十三間也、守清元扶、又別当平超造立四十三間并講堂東廊十間、合五十余間也、其残別当増祐造立也、但押通子、小壁、鼠門等未修補、但長押所々打、

2　薬師寺回廊略年表

天延元（973）・2・27 （天禄4）	食殿（十字廊）より出火して食堂・講堂・三面僧坊・回廊・経蔵・鐘楼・中門・南大門等焼失、金堂・東西両塔は災を免れる（薬師寺縁起・日本紀略）。
天延元（973）・3・28	宣詔を下して諸国に薬師寺造営を分担せしむ。回廊は、中門・回廊卅間備前国、卅間備後国、廿二間安芸国、十四間・食堂播磨国が担当す（薬師寺縁起）。
永長元（1096）・11・24	地震により回廊顚倒す（中右記）。
康安元（1361）・6・24	地震により金堂・東西両塔破損し、中門・回廊・西院等顚倒す（嘉元記）。



伽藍配置復原図（複廊）